京都女子大学図書館所蔵『無名抄』写本覚書

――梅沢本の元禄七年時臨模本――

中　前　正　志

木下華子氏「『無名抄』伝本考」（『東京大学国文学論集』5、平22　同氏著『鴨長明研究――表現の基層へ』〈勉誠出版、平27〉再収）は、『無名抄』の主要な写本・版本計二十本を対象として綿密に分析し、系統分類する。「取り上げることのできなかった伝本も数多くあり、本文の性質と享受圏の関係など、残された問題は多い」（木下氏前掲書115頁）としても、体系立った伝本研究がいまだなかった状況のなか、『無名抄』読解の最も根源的な基盤を築いたと言うべく、同書さらには長明の研究にとって大きな意味を持つ成果であるに違いない。

ところで、京都女子大学図書館にも、国書総目録などに登載されず右の木下論文にも取り上げられていない『無名抄』写本が二本存する。大きな意味を何ら持ち得ず取り立てて問題にするほどでもない伝本ではあるが、右木下論文に導かれつつ、二本のうち特には貴重書に指定されている方の一本について、誌面の余白を借り若干のメモを書き付けておきたいと思う。

京都女子大学図書館所蔵『無名抄』写本二本のうち袋綴一冊本（請求記号914.42/A6　図書ID番号0085105 09-0）は、

流布本系『方丈記』写本と合綴されたもので、江戸前期頃の書写本（拙編『東山中世文学論纂』〈私家版、平26〉187頁参照）。『無名抄』の方の内題・目録題ともに「無名抄」。一面十行。見出しは一行を取って書き、和歌は行頭より概ね一行書きにする。版本などに見えるのと同様の奥書「鴨長明抄云々／本ニ　元亨二二年五月十八日於久我殿」を有する。木下論文に示された「主要異同一覧」などによって確認するに、同論文が系統分類するうちの、版本などを含む第三類第二群に属するもののようである。

今、特に取り上げたいのは、右のものとは異なる別のもう一本、貴重書に指定されている列帖装一帖本（請求記号KN911.101/Ka41　図書ＩＤ番号0002432010）である。縦二四・九×横一六・四cm。料紙は斐紙。表紙は本文共紙。外題・内題ナシ。桐箱の蓋表に墨書「従二位刑部卿惟庸卿筆」。前後表紙以外八十四丁。本文は、第一丁裏から書き始め、第八十三丁裏二行目まで続く。第八十四丁表に奥書あり。一面八～十行。目録はなく、段落の替り目は朱の合点で示す。段落の見出しも朱書、本文とは別筆か。和歌は、改行し概ね二字下げて、上句・下句に分け二行に書く。奥書は、次の通り（改行など元のまま　翻刻に際しては大谷俊太氏に御示教頂いた　後掲写真参照）。

右無名抄九条殿文庫之御本也
伝云作者所自筆也雖未見
類筆誠ニ古躰殊勝之物歟
仍申出乞臨写者也
元禄七年九月日　刑部尚書惟庸

右奥書によれば、元禄七年（一六九四）九月に刑部尚書惟庸によって作成された臨写本である。また、作者自筆本つまりは長明自筆本と伝えられる九条家所蔵本を親本として筆写したのだという。刑部尚書惟庸とは竹内惟庸[注1]（一六四〇

〜一七〇四）で、公家であり歌人。貞享三年（一六八六）に刑部卿に任じられ、元禄十四年（一七〇一）に従二位に叙せられている。摂津の国学者野田忠粛の師で、忠粛に『柏伝』を伝授したことが知られる（『柏伝』〈刊年不明須原屋茂兵衛他版〉序に「竹内家のおほん伝へを受給つてより、かしはの種々をつくさんとをろ〳〵書出し侍れは、三十余りにみちぬ。……野田忠粛誌之」）。

ところで、『無名抄』の最古写本として知られるのは、現在東京国立博物館に所蔵される梅沢記念館旧蔵本（梅沢本）であって、鎌倉時代の写本。重要文化財に指定されている。日本古典文学刊行会より「複刻日本古典文学館」の一冊として複製本が刊行され、『鴨長明全集』（貴重本刊行会、平12）には影印と翻刻、角川ソフィア文庫には翻刻と訳注が収載される。e国宝にて画像データが公開されてもいる。右の京都女子大学図書館所蔵列帖装一帖本（京女本）は実は、この梅沢本の忠実な臨模本なのである。字体・字形・字配り・行数など、梅沢本とほぼ完全に一致しているし（後掲写真参照　梅沢本の写真は「複刻日本古典文学館」より転載、京女本の写真は京都女子大学図書館所蔵複製本より転載）、梅沢本が六括から成る列帖装である（「複刻日本古典文学館」・『鴨長明全集』解題）点なども受け継いでいる。また、梅沢本に見られる以下の傍記・傍注などもそのままの形で再現する。

まはして。わろく（1ウℓ3　→後掲写真参照）
心得つれは。題を（2オℓ2）
さうなり（5オℓ8　→後掲写真参照）
と。そ申されけれ（8ウℓ1）
建春門。院（8ウℓ3）
ゑしら。ぬ（9ウℓ8）

身のはふる。こと（14オℓ4）
哥にてよみて侍る（18オℓ6〜7　↓後掲写真参照）
彼いての大臣の堂（19オℓ5〜6）
たかひ侍らす。たゝこの井て河にのみ侍なり（19ウℓ9〜10　↓後掲写真参照）
たれ人のしみか（21ウℓ10）
すわうのないしは（22ウℓ7）
師のおもひのほかに（25オℓ6〜7）
左衛門佐。にあひ申たれは（29ウℓ4）
しらぬをゝしはかりひたる（31オℓ5〜6）
すかたは花麗きはまりぬれは（35オℓ9）
金葉。に（45オℓ2　↓後掲写真参照）
もとより。ならねは（45オℓ7　↓後掲写真参照）
これの物の上手のしわさとは（59ウℓ9〜10）
宗論のたくひ。て（60オℓ9〜60ウℓ1）
す。ましき也（70ウℓ7）
たをよかなる（71オℓ5）
さむくなる。そ（71ウℓ2〜3）
やかすめかたくて（80ウℓ5）

ただし、梅沢本を再現し損なった箇所、敢えて再現しなかった箇所も、若干見られる。梅沢本の第四十一丁表の最終行「哥の中には」が京女本に見えない（後掲写真参照）のは、誤って写し落としたのであろう。また、梅沢本に見られる次の傍記「本ノマヽ」や振り仮名「イ」「チヤウくわン」は記入していない。

くろぬし（本ノマヽ）の明神（32ウℓ1　→後掲写真参照）

いますかる（本ノマヽ）へき（43オℓ6）

俊頼はまの（本ノマヽ）なく（47オℓ8）

めつらしき意（イ）こをそへ（62オℓ6）

へつらへる意（イ）ことも（62オℓ9）

广官（チヤウくわン）（78ウℓ7　→後掲写真参照）

あるいは、梅沢本が「まそうのいと（を歟）」（18オℓ7）と記す、その傍記「を歟」のうち「歟」は記していない（後掲写真参照）。次のように、傍記に従った形に本文を変更してしまっている場合も見られる（後掲写真参照）。

いつもやへかきのかたよりこそは（61オℓ1～2）→いつもやへかきのうたよりこそは

ちからなき所はかな（ま歟）にてかく（76オ～76ウℓ1）→ちからなき所はまなにてかく

さらに、段落の替り目を朱の合点で示し見出しを朱書きするのも、梅沢本と同じであるが、見出しの字形などは特には似せていない（後掲写真参照）。

以上の通り、細部におけるごく一部分を例外として、京女本は梅沢本の忠実な臨模本となっているのである。このような模写は、「名筆家の筆跡を尊重し、それを精密に複製して享受しようとするところから生じた方法」（『日本古典書誌学辞典』）であるに違いなく、「伝云、作者所自筆也。雖未見類筆、誠ニ古躰殊勝之物歟」（先引京女本奥書）という

ことで、梅沢本が竹内惟庸によって臨模されたのに相違ない。なお、右引奥書中の「伝云、作者所自筆也」は、梅沢本の箱書に「無名抄　鴨長明真筆」とある（『鴨長明全集』解題、角川ソフィア文庫・解説）のと符合する。

梅沢本の忠実な臨模本である京女本は、梅沢本が存する以上、その本文上の意義をほとんど全く有しないということになる。京女本の持つ意義は、最古写本である重文指定の梅沢本の享受・伝来について若干の情報をもたらしてくれるという点にほぼ限定されよう。その情報とは、およそ次の二点。

・元禄七年に、野田忠粛の師であり歌人でもある竹内惟庸によって忠実に臨模された。

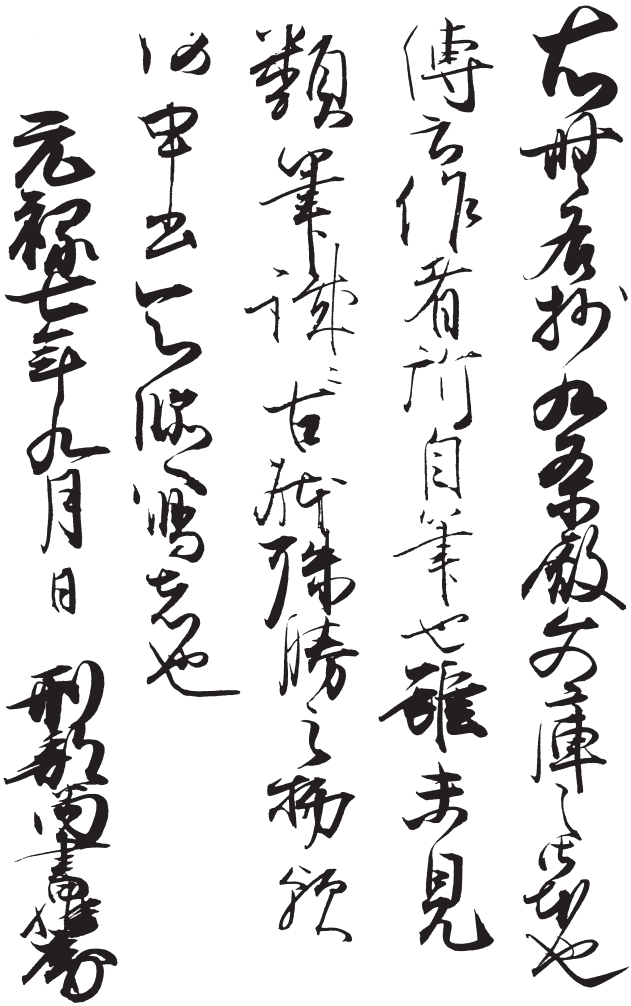
・京女本の先引元禄七年奥書に「右無名抄九条殿文庫之御本也」、また「伝云、作者所自筆也」とあるから、少なくとも元禄七年時には、長明自筆本として九条家に所蔵されていた。

右のうち特に注意されるのは、後者。梅沢本が書写された当初の鎌倉時代から、九条家に所蔵されていたのだろうか。また、長明と九条家の何らかの関係が指摘されているが、[注2]そのことと九条家に長明自筆という『無名抄』が伝来したこととは、繋がるところがあるのだろうか。そういった問題を考えさせるものがあろう。

注1　『国書人名辞典』など参照。

注2　木下前掲書287頁のほか、山岡英彦氏「大原から日野へ―隠遁地移動の宗教的背景―」（『鴨長明の研究』第一集、昭49）、池田利夫氏「鴨長明の大原と日野―禅寂伝に関する新資料管見―」（『日本古典文学会々報』129、平9）、兼築信行氏「『玉寄する三崎』考―『鴨長明集』の左注歌をめぐって―」（『国文学研究』167、平24）。

付記　京女本の閲覧等について種々お世話になりました京都女子大学図書館の関係各位などに深謝申し上げます。



京女本・奥書
（京都女子大学図書館所蔵複製本より転載　以下同）

題

詠ハ題ノ心ヲヨクヨウヘキナリ俊頼ノ髄脳
ニイハク物ニノリテ侍ノ哥ヲヨムベシ文字中ニ
ヨムベキ文字ヲ中ニヨミテヲクベキコ
ヨロシキ哥アリ哥ヲシルヒトヲヨムヒトヲ称ト
モヒトノ一ツ二ツ三ツ文字ニハアラズ
暁天落花 雲間郭公 海上明月 これ
くハ第二の文字ハ哥ノ体ヲヨスルモ自然
ノ題ヲヨムベシ具シテ記ス哥アリ

梅沢本・１ウ
（「複刻日本古典文学館」より転載　以下同）

題心

詞は題の心ばへよくいふべきなり。俊頼の藤原
とゝの姫物がたりとて侍るかな。
よむべき文字中くまゝにてゆゝしくきこ
ゆるもあり。かゝるをよんでをよんだる
をおのづゝからゝ文字をはなれ
曉の落花　雲間の郭公　海上の明月　これらは
くゝ米二の文字かゝるべしとよまれたる
りの題をよむに具してたゝるもあり

京都女子大学藤原書庫藏

蘭といふ鼠をとらんがためにふ
神のきふをそなへや蘭の枝にかけ
この方をたのもしたるとしれわしゆ
えなくしてそなへとらんなれとこれいかさまと
調をきうしてはく寄よりり

厚海路論

或所にて哥合しける時海路をつくる事とい
ふ題に哥をよみける　ひとりなりけるよめ
もしにうつこれを歌をきうをはたらは
海をつくるたれかおもひてくるよあること

菊といふ題をとよみ侍しに

神なきにおそろしや菊の枝さかすよ

しのおもむきまたたれかしゆゑ

をかしくおそろしやとよめりけれとこれはわさとも

詞をきられて侍らす候よ侍り

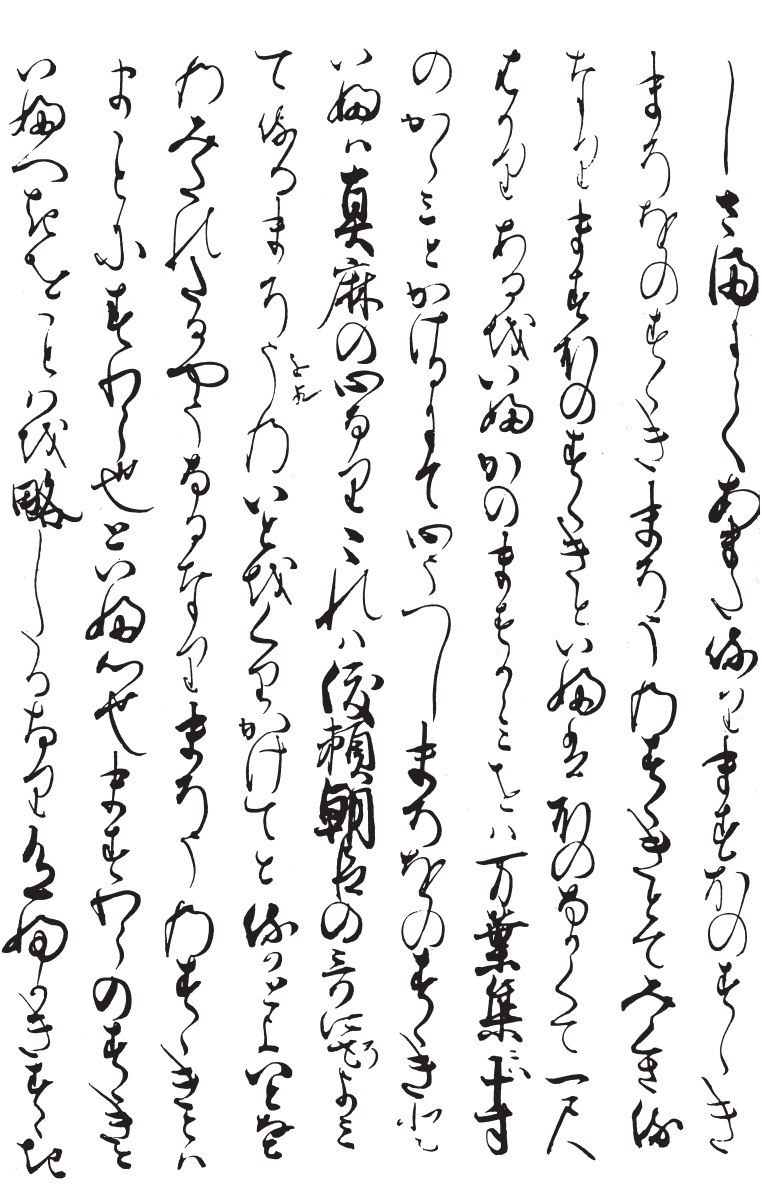
隔海路論

或所にて歌合し侍し時海路を隔つる恋といふ

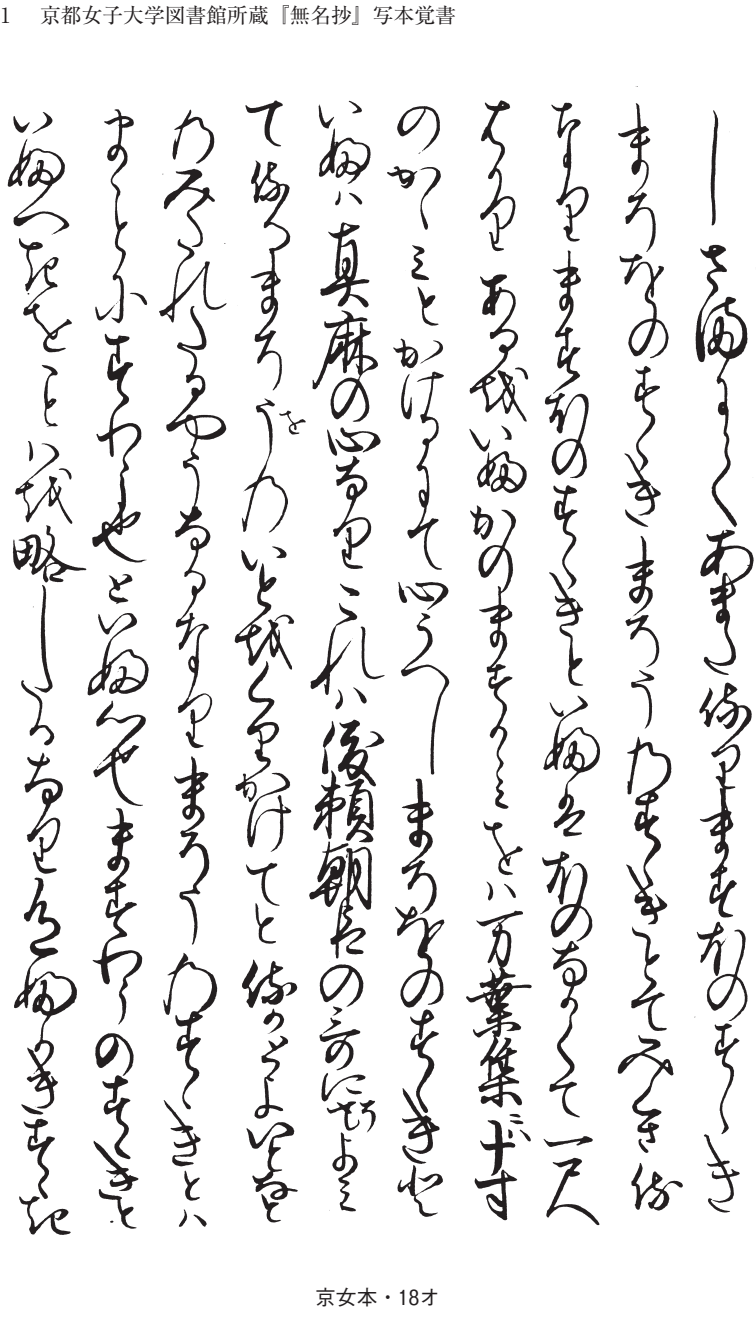
題にかはりて侍しある人のいひしはそのよめ

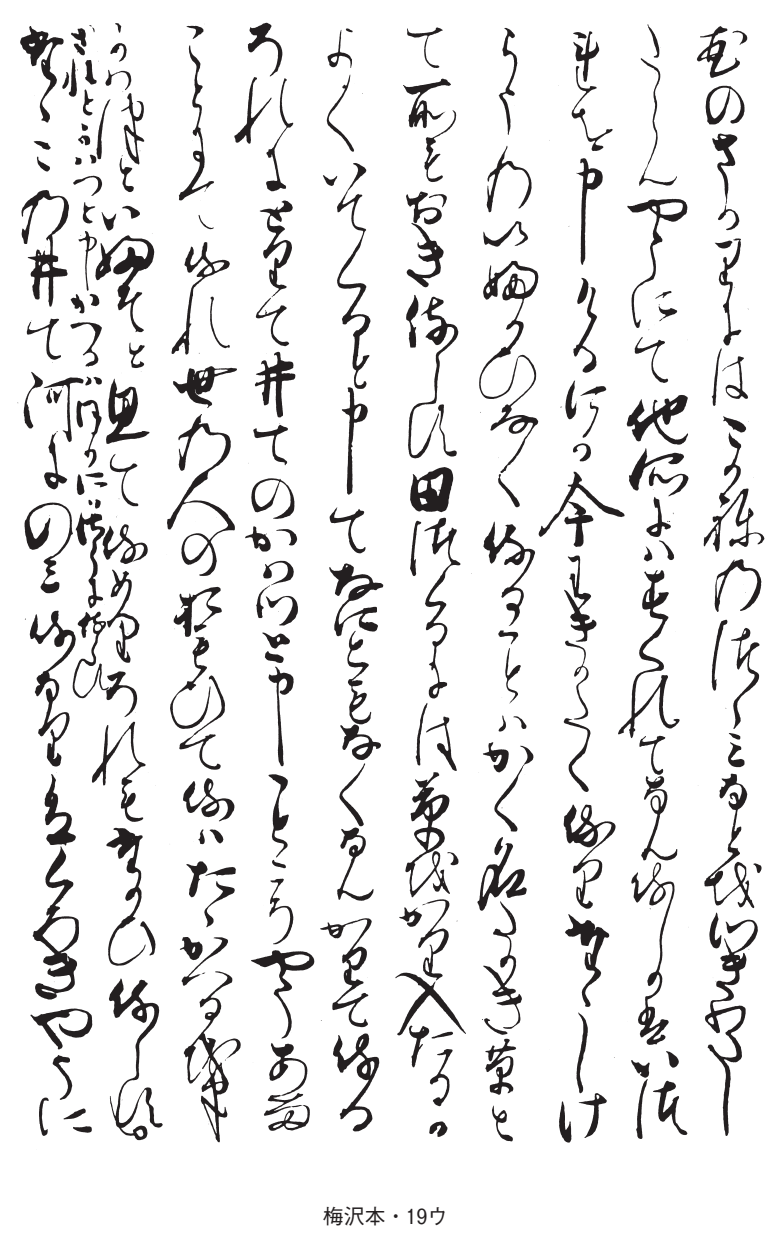
るしにあるかこれを難をさうなるを侍くは

海をとへそなれはおもひつくるよはあることなれ

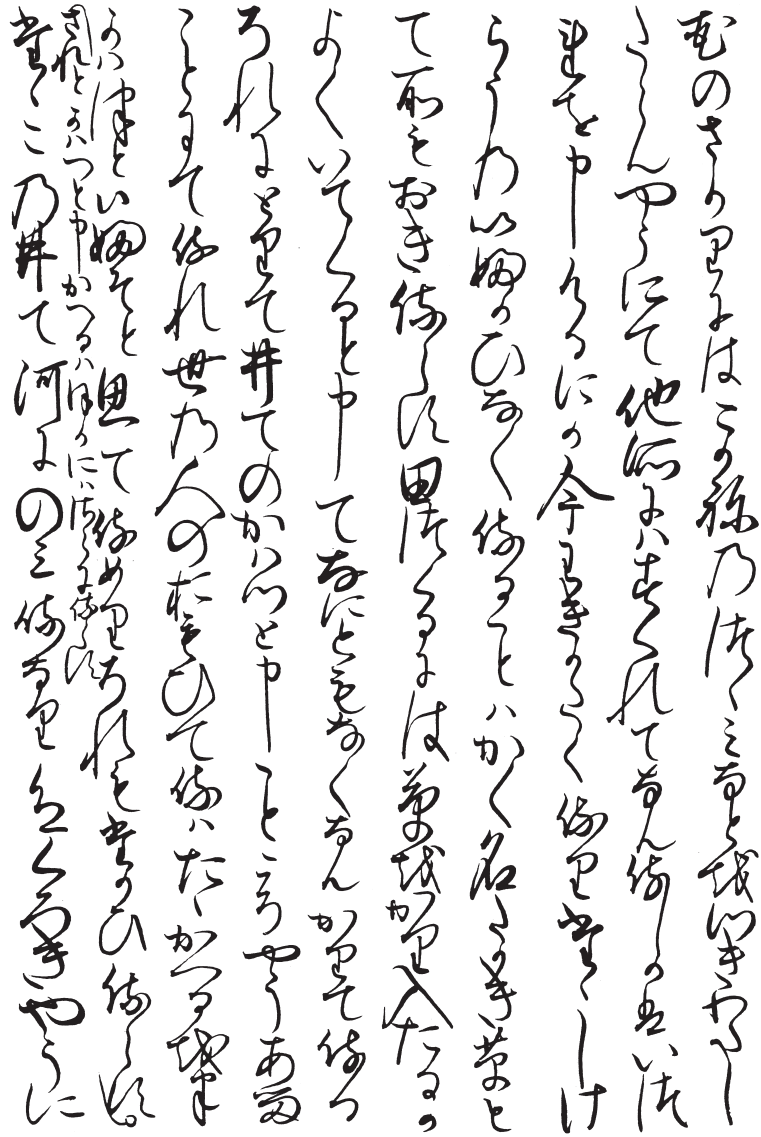


梅沢本・18オ





梅沢本・19ウ



くらぬの明神とも申かたはらに
くらぬの神まします也

喜撰カ跡

又ゆきのおくまの大上りする山中へ入
うち山わけきせっとるん茅ヶ岳とはいはるゝ
そこの石をとりさらふあとこれかなるし
こゝにてみるへきなり

エノ八幡

武人云 富田郷 有賢朝臣ゝ子の殿上人七人
よりとりつくく山とのゐかてしかの方へおそ

梅沢本・32ウ

くろぬしの明神と申かミましますこれはむかしの
くろぬしか神になれるなり

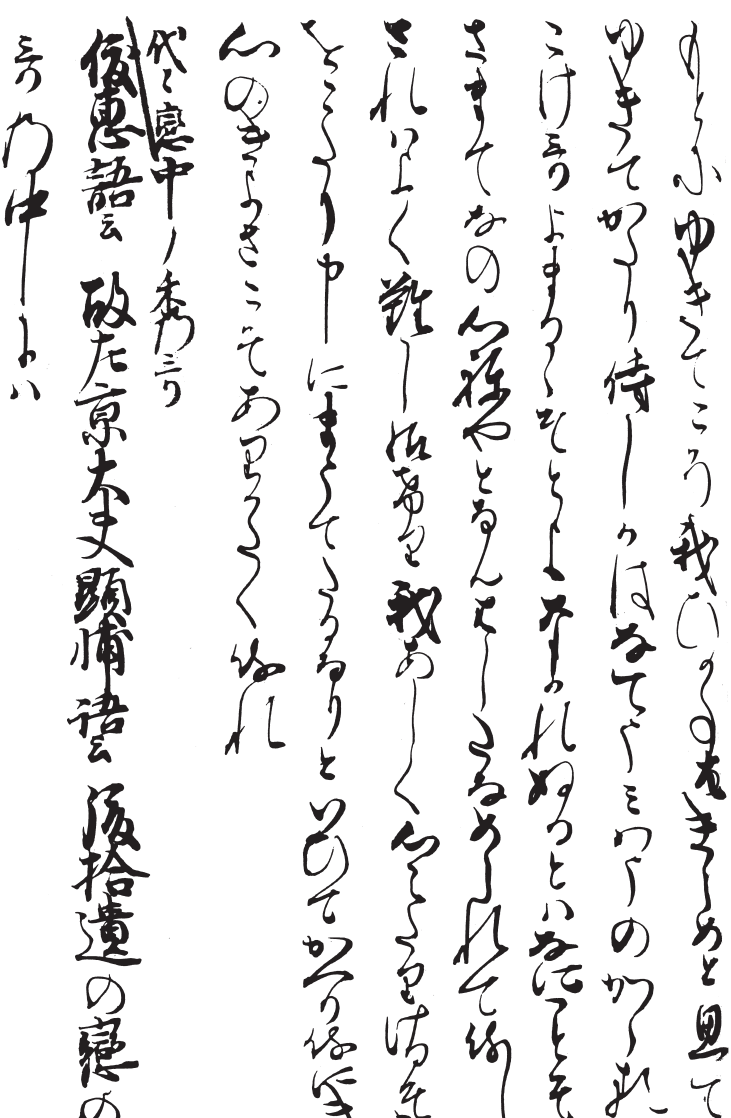
喜撰カ跡

又みむろとのおくに廿よ丁はかり山中へ入て
うち山のきせんかすミけるあとあり家はなけれと
いしすゑなとさたかにありこれらかならす
たつねてみるへき事也

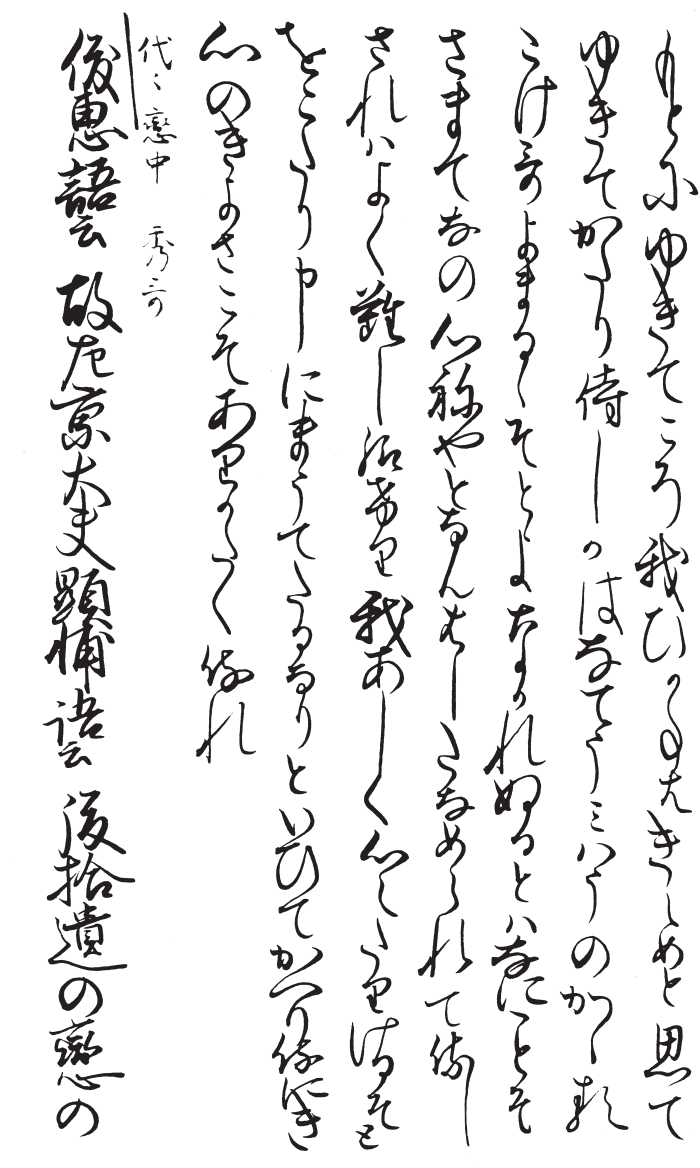
エノ八井

或人云　宮内卿　有賢朝臣　ときの殿上人七八人
あひともなひて　山との国かつらきの方へあそ

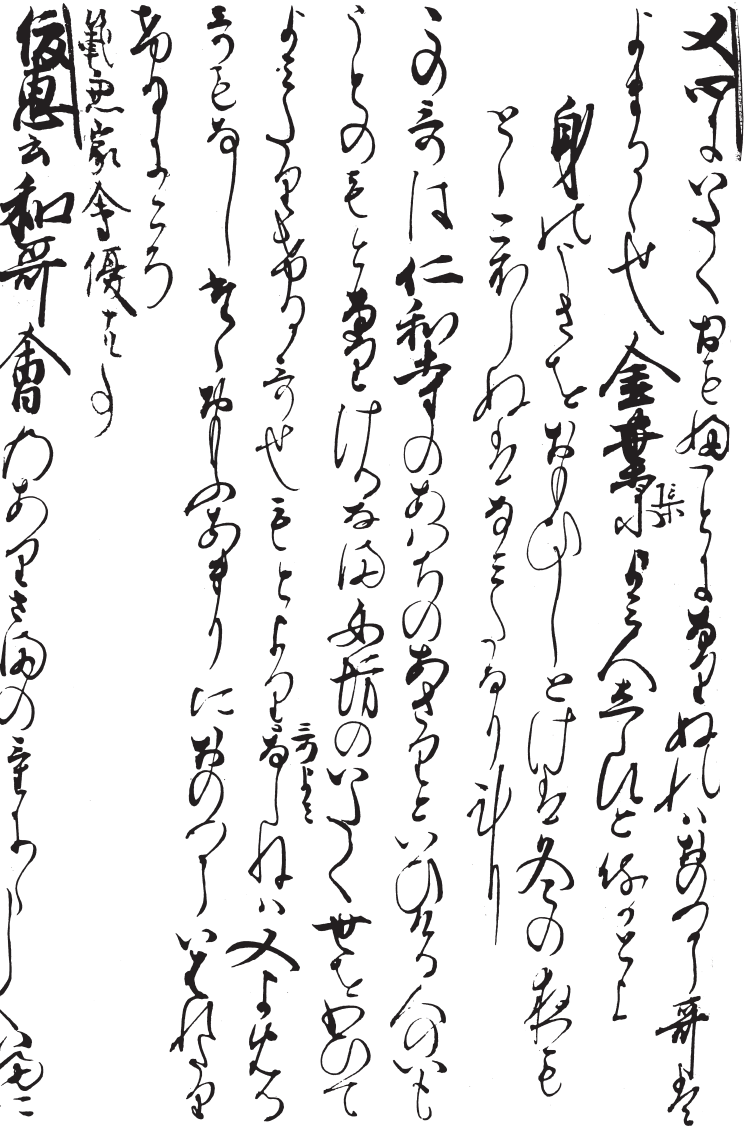
京女本・32ウ



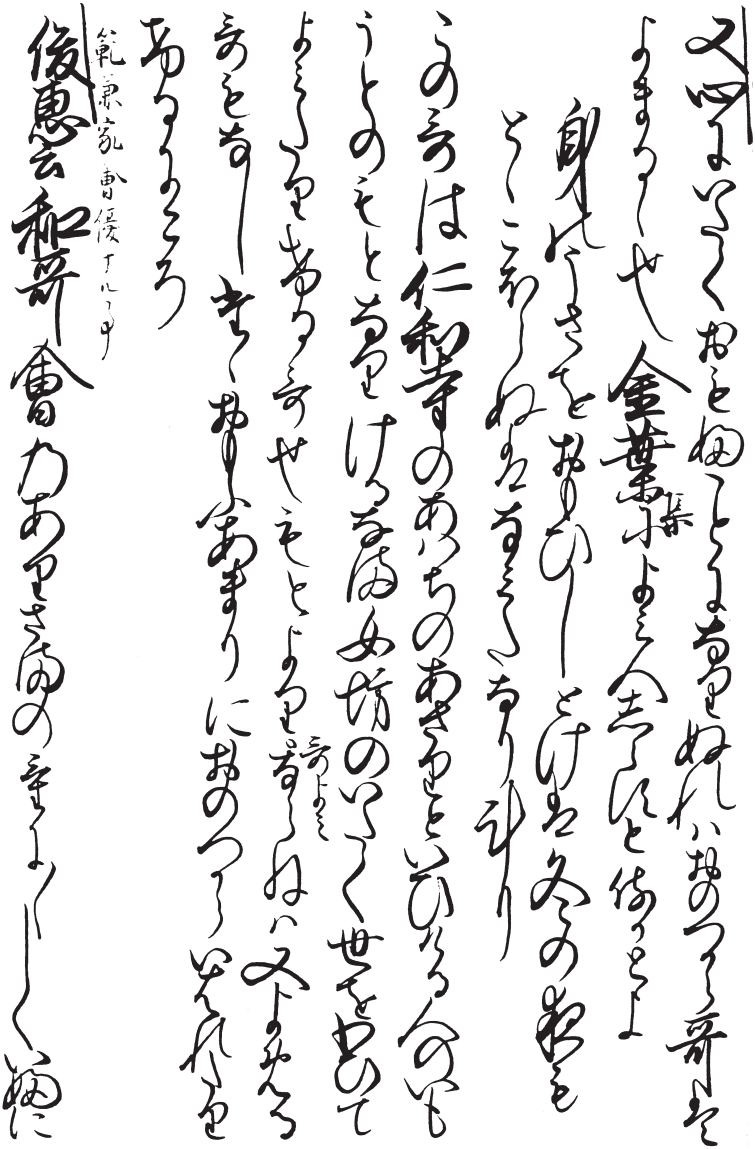
梅沢本・41オ



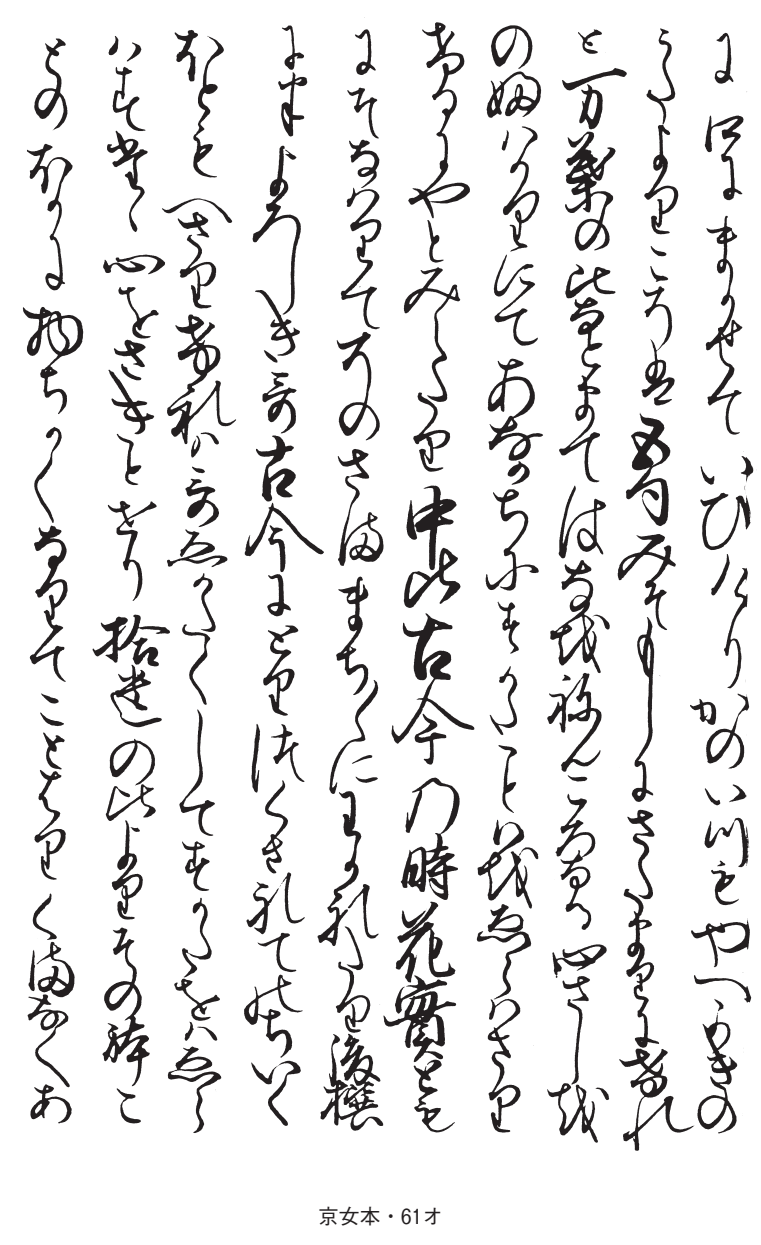
京女本・41オ



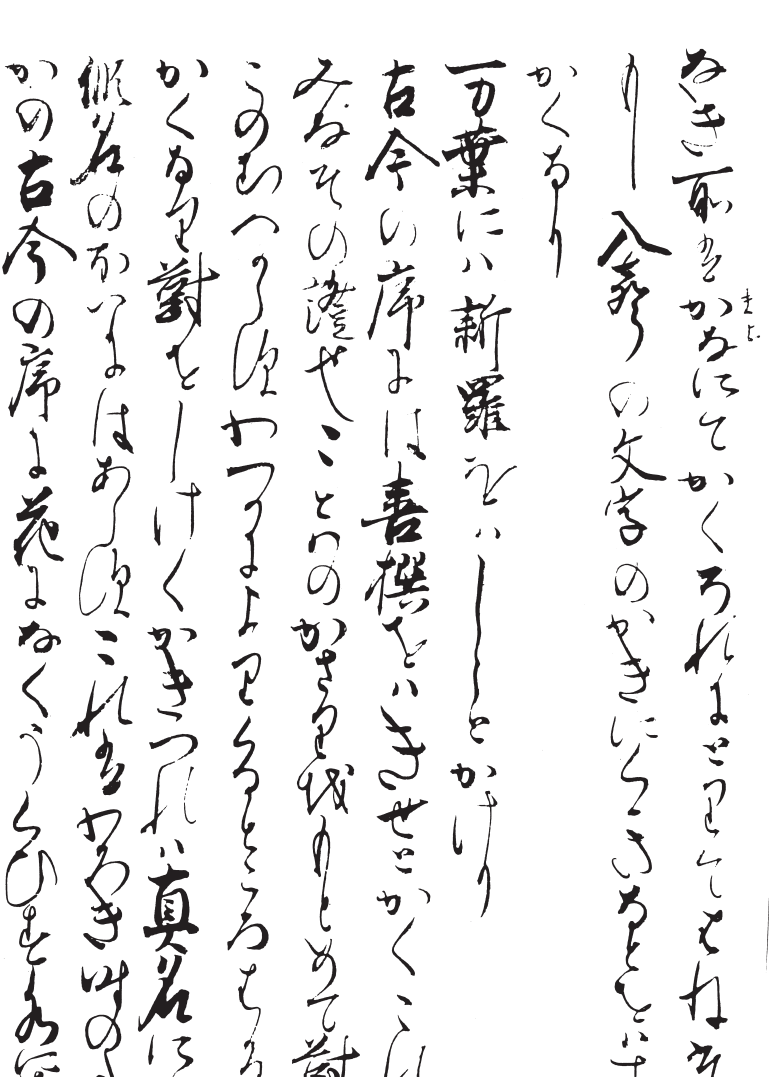
梅沢本・45オ



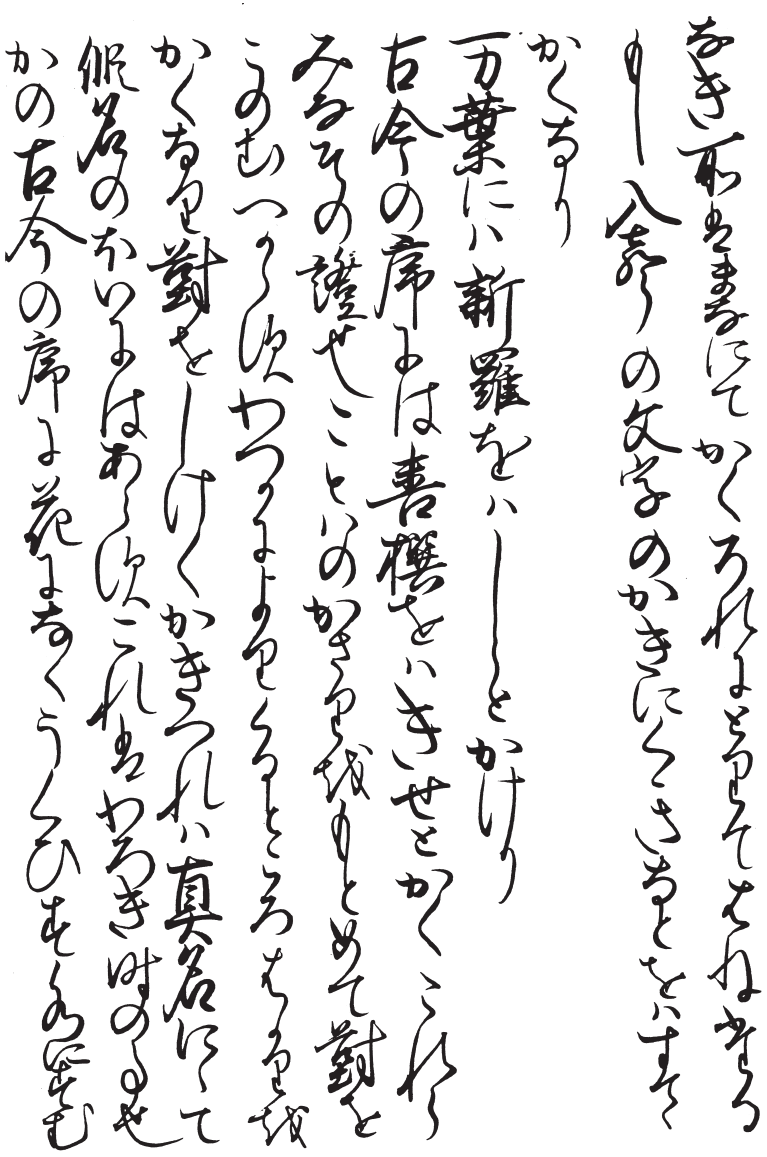
梅沢本・61オ

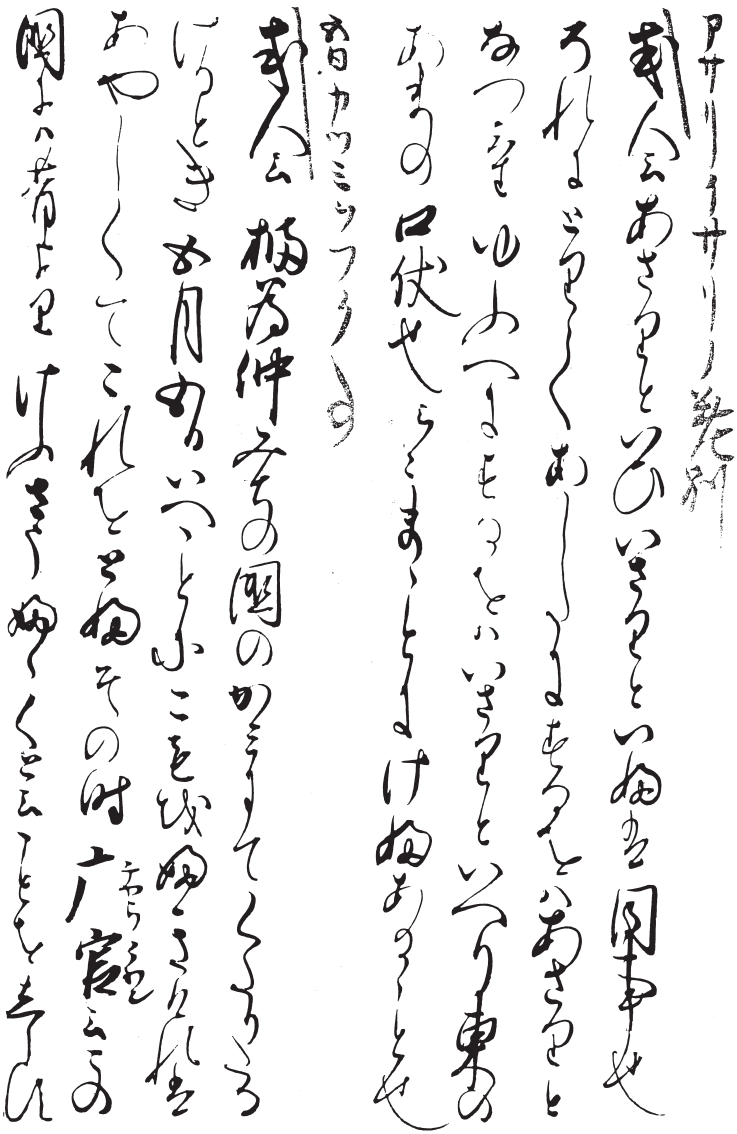


京女本・61オ



梅沢本・76ウ





梅沢本・78ウ

アサリイサリノ差別

都人云あさりといひいさりといはぬ国平也
ろれよりとくあーしよりもろをあさりと
ゆつをゆのつよりもろをいさりといふ東の
あまの家やらまーしよりけはあるしも

八日カツミフクロ

都人云　梅万仲　みちの国のかつまてくろろ
けとき　月ゐいしとふこを城ぬるをれを
あやーしてこれをとぬその時　广宮云の
国よハ者よを　けはさりぬくこをとを